

1 岡部氏作成の Protokol の検討

（1）テキストについて

岡部氏の「見ることも考えることも直観であり、直観は自分から出て自分に還る『意志の自覚』であるから『精神的なるものが自己自身を發展し、自己自身に還る』と説明する。」という個所が議論された。具体的には、テキスト（p.4105～014）の内容である。誤解を恐れず単純化するというならば、直観＝自覚＝満足という図式になろう。すると、水を飲みたいという欲望が満たされると言うことは、自己を対象化し、意志を自覚することとなる。すなわち、それは直観と称すべきものなると考えることができよう。

（2）哲学的問いについて

岡部氏提案の「直観がすべてなら（教育が予定する）段階的な自己の成長などないのではないか？」について議論された。たとえば「家を建てること」と「家をリフォームする」などの異なった直観も成長といえるのかということである。当然、家を建て、古くなったためリフォームすることは家を対象化して自己がその状況に応じて判断するという意味においては、「自己の成長」が認められよう。一方で「自己の成長」についての疑義も挙げられた。「自己の成長」が近代の産物であるという疑義である。その考えからすれば、自己は肥大化するのではなく、状況に応じて壊され再形成されるものであると捉えることができよう。

2 テキストについて

『直観と意志』の p.42 の最終行（アウグスチヌスの考えた如く、～）から p.4405（～一者の上に於て成立するのである。）までを読む。

西田はまず次のように述べる。すなわち、「眞實在は我々の知識の対象たると共に、希望の対象でなければならぬ。此両端の結合に於て、我々に十全なる永遠の眞理がみられるのである。」である。ここでは次のような解釈がなされた。すなわち、「眞實在」とは「一者（to hen）」であり、「知識の対象」は直観に相当し、「希望の対象」とは「意志」である。したがって、「知識」と「意志」との結合によって、我々は永遠の眞理を見ることができるのである。

次においては以下のように述べる。「プロチノスは、精神は二重の力をもって居る、その一を以て、即ち思惟を以て、物を自己の中に見るが、その他を以て、即ち直覚を以て、彼の上にあるものを見る、直覚を以てしては、先ず単に見るものであるが、後之を知り、一者と合一する、前者は思惟の直観であり、後者は愛の直観であると云って居る。」の個所である。「前者」とは、「物を自己の中に見る」ことであり、「後者」とは、「自己の上」である。ここでは、精神が自己の中に物を見るときは、いまだ精神はそれ自身をみることはできない。つまり、主客は分化している。しかし、直覚によって自己の上にあるものを見ることになれば、「作用の作用の立場に於て作用が作用自身を知る」とする。すなわち、自覚である。

最後は次のようである。すなわち、「意志の立場から云へば、如何なる行為も直観の内容として欠くべからざるものでなければならぬ。一者の立場に於ては、すべてが直観の内容とならねばならぬ。空間を超越せるものには、直路も迂路もない筈である。動と静との對立も一者の上に於て成立するのである。」の個所である。意志は一者より流出して一者に還る過程である。そのため、そこで為される行為は無用ではない。すなわち、すべての行為は直観の内容となると考えることができるのである。

【哲学的問い】

・直観の立場からすれば、「教育する」とはどのようなことであろうか。

（今回は、「成長」について自己とは何かとのかかわりにおいて議論された。今回は、直観の立場から「教育」をどのように考えるかについて検討したい。しかしながら、哲学的問いの提案者がこの場にいらないことを深謝いたします。）